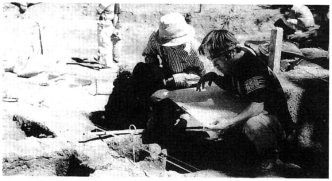
広報
しうら
No. 366
平成13年
9月号

▲小鍛冶炉跡を説明する富山大学前川教授(左)



▲精錬炉跡を調査

本格的な鉄を生産し交易
唐川城遺跡

富山大学人文学部考古学研究室（代表・前川要教授）が発掘調査を行っている唐川城遺跡で９月８日、現地見学会が行われ、前川教授は、防御性高地集落の面積が10万平方メートル以上にも及び、勢力を持った大きな集団で組織的に鉄の生産を行い北海道などと交易を行っていたのではないかという見方を示しました。

今回の発掘調査では、鉄を加工するための精錬炉と小鍛冶炉（こかじろ）が見つかり、小鍛冶炉のすぐ脇には、熱した鉄をたたいて形を整えるための石（金床石（かなとこいし））や鎌の刃先のようなものが出土しており、生活に使う土器が見つかっていないことなどから鉄関連の工房跡と認定できるとしています。

（関連記事８ページ）

発行・青森県市浦村役場／編集・企画財政課企画広報係　〒037-0401 青森県北津軽郡市浦村大字相内字相内349－1　☎ 0173-62-2111
FAX 0173-62-2115

道の駅「十三湖高原」と一体 『モー林(りん)公園』オープン

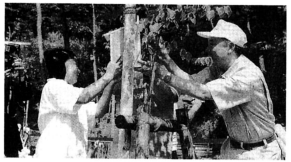
平成十年度から青森県と林野庁が整備を進めていた、十三湖高原地区生活環境保全林整備事業による森林公園「モー林公園」がこのたび完成し、八月二十五日関係者八十人が出席して同公園で竣工式典が行われました。

公園のネーミングは、市浦小学校四年生の青坂祐希さんが発案した「モー林公園」に決まり、放牧された牛と豊かな森林をイメージして名付けられたものです。

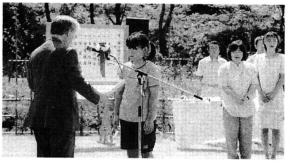
モー林公園は、道の駅と一体となった森林浴のできる公園として整備されたもので、オオヤマザクラほか二十八種類の樹木一万八千本が植えられ、歩いても膝に優しいヒバチップを敷き詰めた遊歩道二キロメートルが整備され、公園の総面積は十・六ヘクタールとなっています。

式典では、高松村長が「森林浴のできる憩いの場として、多くの方々にこの公園を活用してもらいたい」とあいさつ。引き続きネーミング発案者の青坂祐希さん、工事関係者に感謝状が贈られました。

また、オープンを記念して市浦小学校児童らが、記念植樹と巣箱の設置を行い、モー林公園の完成を祝いました。



▶オープンを記念し巣箱を設置



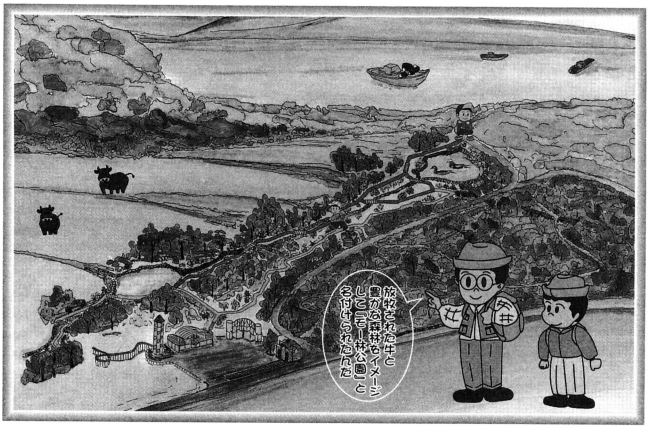
◀ネーミング発案者の青坂祐希さんに感謝状が贈られる

▶竣工式には八十人が参加

◀テープカットでオープンを祝う

▶膝にやさしいヒバチップの歩道

◀階段を登ると道の駅「十三湖高原」



平成13年度 成人式

21世紀を担う若者45人が大人の仲間入り

郷土に拓こうわれらの未来を」テーマに、八月十四日コミュニティセンターを会場に平成十三年度成人式が執り行われました。

成人式には、昭和五十五年四月二日から昭和五十六年四月一日までに生れた、対象者五十七人のうち四十五人が出席し友人との再会を喜び合っていました。

式典では、主催者の木村教育長が「成人式を区切りに責任ある社会人となって下さい。」と式辞。高松村長、工藤村議会議長、相坂利雄選挙管理委員長が祝辞を述べました。

引き続き新成人を代表して、川内美晴さん（脇元）が「自分の行動に責任を持って社会に貢献したい」と二十歳の区切りとしての言葉を述べました。

式には、新成人たちの中学校時代の恩師である鳴海昭喜さん、岡田恵悦郎さんも駆けつけ、「自分の目標に向かってがんばってください」と新成人となった四十五人を激励しました。

式典終了後に行われた祝賀会では、近況報告や久しぶりに会う友人と記念撮影を行うなど楽しい時間を過ごしていました。

◀新成人のみなさん

新成人を代表して

川内 美晴さん
（脇 元）
し～うらんど海遊館勤務

- いつも心がけていることは？
  『笑顔をたやさず。』
- 村の好きなところは？
  『やはりし～うらんど海遊館です。』
- 将来の夢は？
  『立派な大人になりたいです。』
- 新成人を代表して、誓いの言葉を述べましたが。
  『少し緊張しました。』
- 休みの過ごし方は
  『ドライブやショッピングです。』
- 今したいことは
  『旅行がしたいです。』
- 好きな異性のタイプは
  『しっかりした人。』
- 最後に成人式を区切りにどんな大人に
  『責任をもって行動する大人になりたいです。』

特産品販売・郷土芸能・よさこいソーランに3000人

第五回 道の駅・十三湖高原まつり

八月二十五日、二十六日の二日間、道の駅・十三湖高原で、「十三湖高原まつり」が開かれ市浦牛やじみ貝、市浦産野菜、もや焼などの地元特産品販売などに、二日間で延べ三千人の人出でにぎわいをみせました。

まつりでは、十三の砂山、脇元小馬踊り、相内の虫送りなどの郷土芸能や市浦村・上ノ国町の友好町村の「天龍風神」によるよさこいソーランも披露され、迫力ある踊りに、会場に詰め掛けた観光客から盛んな拍手を浴びていました。

▶たくさんの人出でにぎわいを見せました

▶上ノ国町天龍風神のメンバーも応援出演

▲「市浦産野菜」売れ行き好調

▲もや焼きの品定め

平成13年度 宝くじ助成金で

～イベント用テントを設備～

平成13年度宝くじ助成金でイベント用テント8基を整備しました。

今後、村で行われる各種のイベントの事業で活用されます。

▲宝くじ助成金で整備されたイベント用テント

▲上ノ国町特産品を販売

▲モー林公園「ウォークラリー」に申し込む参加者

水槽付ポンプ車を更新

津軽北部広域事務組合 市浦消防署

八月一日、市浦消防署に新しい水槽付ポンプ車が配備されました。

今回配備されたポンプ車は、従来のポンプ車と比べ、積載水量が二千㍑に増え（従来千八百㍑）、揚水装置も手動式から自動式に、四百㍗の照明灯が二個付属されるなど、最新式の特殊設備を搭載しています。駆動方式も従来の二輪駆動から四輪駆動になり、悪路や冬場の走行に更に偉力が発揮されます。ポンプ車の購入費は約三千万円。

この日の納車に併せ消防署で執り行われた入魂式には、工藤助役、吉田消防署長をはじめとする消防隊員ら関係者二十六人が出席、玉ぐしを奉てんし安全を祈願しました。

引き続き工藤助役が「最新鋭の設備を搭載した新しい戦力（ポンプ車）が加わった。初期消火に威力を発揮させ、住民の安全を保障するためにさらにがんばって下さい」と署員を激励しました。

今回の新しいポンプ車の更新により、昭和五十七年十月に配備された、従来のポンプ車はその役目を終えることになりました。

▲今回配備された新型ポンプ車

▲19年間の役目を終えたポンプ車

地域の福祉活動を支援

青森県生命保険協会が村社協に福祉巡回車を寄贈

青森県生命保険協会から、村社会福祉協議会（工藤誠一郎会長）に福祉巡回車一台（軽ワゴン車）が寄贈され、九月五日関係者が出席して寄贈式が行われました。

同協会の巡回車寄贈は、地域の福祉活動を支援する目的で平成三年から継続して行われている社会貢献活動「巡回車購入資金」も同協会会員四千人の寄付で賄われているもので、当村で二十六台目の寄贈となります。

悠遊郷前で行われた寄贈式では、工藤会長に目録と大型のキーが手渡されたあと、関係者によるテープカットが行われました。引き続き高松村長が「市浦村では配食サービス、訪問看護などの福祉活動を展開しているが、手足となって動く車が足りない状況だった。キメの細かい福祉サービスをするための大きな力にしたい」とあいさつ。同協会に村社協から感謝状が贈られました。

村社協では、福祉サービスをより充実するため有効に利用することにしています。

▲工藤会長に大型のキーが手渡されました

▲寄贈された福祉巡回車

原子燃料サイクル事業推進特別対策事業で整備

実取地区のほ場整備された農道は、原子燃料サイクル事業推進特別対策事業で舗装されました。

▲対策事業で舗装された農道

夏まつり 2001

お盆期間中、村内各地区で夏まつりが行われました。十三地区では、今年完成した、緑地広場で「十三の砂山」まつりが行われ、にぎわいを見せていました。

相内地区も、子供たちがねぶたを運行。残り少ない夏のひとときを楽しんでいました。

◀ねぶたを運行（相内地区）

▼「十三の砂山まつり」

▲地域のまつりが子供たちに受け継がれます（十三の砂山）

▲「やきとり、おでんはいかが」十三壮青年団の皆さん

▲国際交流に一役 アレンさんも踊りの輪に（相内地区）

新やまなみ号運行終了

～運行期間中の乗客数は266人～

市浦・蟹田間を結ぶ、観光路線バス「新やまなみ号」が40日間の運行を終了。期間中の総乗客数は、266人で、一便あたりの平均乗客数は、1.6人の実績になりました。

◆新やまなみ号 乗車実績◆

年度	運行日数	乗車人数	1便当りの乗車人数
平成11年度	92日	1,015人	1.8人
平成12年度	62日	441人	1.7人
平成13年度	40日	266人	1.6人

※11年度は1日3往復（やまなみバス）
※12年度から1日2往復（新やまなみ号）

◀四十日間運行された「新やまなみ号」期間中は二六六人が乗車

市浦村の埋蔵文化財④
唐川城の発掘調査

はじめに

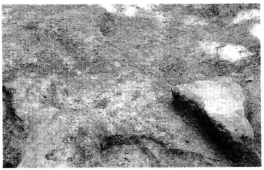
去る八月二十四日～九月八日にかけて、富山大学による市浦村・唐川城の発掘調査が行われました。今年で三年目となる唐川城の調査では主に測量調査や発掘調査が行われました。今回は唐川城の発掘調査の概要をお話します。

唐川城とは?

唐川城は十三湖の北岸に位置し、標高百六十m程の独立した丘陵上にあります。地元の伝承では安藤氏と南部氏の戦において、唐川城が安藤氏の詰城に利用されたと伝えられています。その中で唐川城を防ぎ切れなくなった安藤氏は財宝を唐川城の井戸に投げ込んで逃げ、小泊の柴崎城（権現崎の先端部）から、北海道に渡ったと伝えられています。

しかし、こうした伝承や脚色された近世以降の編纂物によってしか直接、唐川城の名前を確認することができません。同時代史料で直接その名が確認できたわけではないため、安藤氏の頃に唐川城と呼ばれていたかも定かではありません。

そのため、考古学による発掘調査を行うことによって、唐川城が利用された時代やその当時の人々の生活ぶりを解明することになったのです。



▶今回の調査で出土した鍛冶炉跡（石は金床石）

▶出土した五所川原産須恵器

調査でわかったこと

①城跡は安藤氏が一時的に利用しているものの、基本的には安藤氏が台頭する以前の平安時代後期（十世紀～十一世紀）にあたる防御性・高地集落であったことが分かりました。

②城跡は大きく三つの郭（北郭・中央郭・南郭）に分かれており、北と南の郭に大きな井戸跡があること。また、古代の防御性・高地集落としては十万㎡以上もある津軽地方でも最大規模を有する拠点集落と考えられます。

③南郭の調査では井戸の周りに竪穴住居が二件みつかりました。ちなみに一号住居跡は約九m×八・五m四角形を呈しており、内部には竈や鍛冶炉が見つかっています。鉄製品を作る工房跡と考えられます。

④最も大きな発見は古代の竪型炉と呼ばれる鉄を精錬する炉跡が見つかったことです。鉄を作るにはまず製鉄・精錬・鍛冶の三つの行程がありますが、ここでは二番目の行程の跡が見つかりました。

まとめ：防御性・高地集落とは?

この時期（十～十一世紀）には東北北部から北海道南部にかけて、集落の周りを堀で囲み、敵からの攻撃を守る環濠集落や、標高の高い丘陵上に堀を巡らす高地性集落が造られるようになります。この時期になると、本格的に津軽平野を開拓し、水田・稲作農業社会を迎えています。わかり易く言えば、東北北部が西日本の弥生社会の段階に到達したと評価する人もいます。また、岩木山麓一体の鉄生産や五所川原の須恵器生産、陸奥湾沿岸の塩生産などが行われ、日本海を通じて北海道との交易や交流が活発になる時期でもあります。こうしたことから、安藤氏が中央に台頭する以前から唐川城に拠点を置いた在地の豪族が鉄生産を行い、交易の拠点としていたことが分かりました。

▲今年度の唐川城発掘調査

文責　市浦村教育委員会
学芸員　榊原　滋高